**特別講演要旨**

**マードック哲学とティリッヒ神学の接点**

**岩村　太郎**

　いきなりは天国へは行けないので、天使が連れて行ってくれます。お伽の国へもすぐには行けないので、妖精や小人や魔法使いのおばあさんが居てくれます。地獄にもすぐには落ちないでしょう、でも人間の顔をした鬼に出会うと大変です。概念の世界である哲学の国へも、神様の住まう神学の世界へも、また美的文学の空間へも私達は直接行くことはできません。でもティリッヒやマードックを深く読んで学べば、そのとば口までは行けるかもしれません。パウル・ティリッヒ（1886～1965）は、1933年にナチス批判の廉でドイツからアメリカに亡命した哲学者であり神学者。主著は『組織神学　全Ⅲ巻』と『生きる勇気』、白水社から出ている著作集に多くが収められている。ティリッヒはプラトンとキルケゴールから決定的影響を受けた。

　ティリッヒとマードックの接点はプラトンにあろう。特にプラトンのイデア論を正確に理解しなければなるまい。あれほどまでに繰り返されたマードックのイデア論への言及は、決して見逃せない。一切の現実を歪んだ現象ととらえ、その背後に歪まない純粋なイデアを想定するプラトニズム。多かれ少なかれこのイデア論に影響された者は、観念論的ロマン主義の傾向を持つ、即ち有限なものの中に無限なるものが含まれている、と。やがてティリッヒは哲学から神学へ、マードックは哲学から文学へとその興味が移って行った。ティリッヒの名を高めたキーワードは究極的関心（ultimate　concern）である。神への信仰を人間の持つ究極的関心から理解しようと努め、何とかしてニヒリズムとエゴイズムを克服しようとしたティリッヒ。さらにティリッヒは歴史への関心が深く、独特の時間論であるカイロス、神が支配するセオノミー、また人間精神にある創造と破壊エネルギーの一致であるデモーニッシュなものなどを歴史哲学のテーマとした。

　当然なことにティリッヒもマードックも当時の哲学的流行の洗礼を受けた。共通しているのは実存思想と現象学である。マードックはさらに論理実証主義やフランス哲学など、当時の最先端思想に遭遇し、若干の関心を示しているようではある。しかし厳密には、それらを単に追っていたようにも思われ、必ずしもマードックが流行哲学に本当に影響されていたとの確証は私は持てない。様々な外国哲学、特にサルトル思想などを器用に吸収しながらいよいよマードック哲学確立と思いきや、発表した文学で余りにも圧倒的に高い評価を得てしまったマードック。秀才マードックは変わり身も早かった、しかし文学で名声を得た後もプラトンのイデア論への根本的関心だけは失っていなかったようである。究極的には「善」なるものに辿り着いたマードックは、この善なるものによって全ての折り合いをつけようとしたのであろうか。少なくともティリッヒの場合は、人間の持つ究極的関心を信仰と結びつけ折り合おうとしている。

　哲学研究から出発して、カトリックには伝統的にあるもののプロテスタントにはなかった存在論的神学という新たな分野を確立したティリッヒ、古代ギリシア以来の正統的ヨーロッパ哲学をきちんと学び消化吸収した後、文学の世界に飛び込んでいったマードック。先行研究の分析に留まらず、しかも時代の波もしっかり受け止めつつ、模倣から吸収へ、吸収から脱皮、そして最後に自己回帰を見事に成し遂げたティリッヒとマードック、この二人の接点を探ることが、本講演の第一の課題である。ただしマードックに関しては私は専門家ではないので、思わぬ誤解と無知をさらけ出すかもしれない。マードック学会員の方々のご助言を賜りたい。
（ 恵泉女学園大学教授 ）